

## 授業カリキュラムにおけるアドベンチャーカウンセリングの実践

### －導入からこれまでの取り組みについての報告－

小西浩嗣（帝塚山大学全学教育開発センター）

#### 1. はじめに

本学にアドベンチャーカウンセリング（Adventure Based Counseling：以下 ABC）が導入されて 15 年が経過した。当初は学生たちの全人的成長、対人関係力向上の教育手法として心理福祉学部心理学科の授業カリキュラムに導入した。その後、心理学科以外での学部学科での単発科目（「健康科学」など）での開講を経て、2017 年度からは全学教育開発センターの特別講義開講科目として全学部学科学生対象に ABC が提供されることになった。

2020 年度は、コロナウィルス感染拡大により、ABC 科目についてはウェブ会議システム Zoom を用いて開講され、また人間環境科学研究所企画「コロナウィルスに負けない授業展開」での実践で 2 回にわたって ABC を教職員に紹介し、今後のオンラインでの授業実践「Zoom アドベンチャー」の可能性、およびオフライン（対面）における ABC の効果が示唆された。

本稿では ABC の本学への導入からこれまでの実践報告を踏まえて、今後の展望について述べる。次節では、まず ABC の歴史背景と教育理念および手法について触れ、第 3 節ではこれまでの授業および地域連携・貢献での実践について報告する。第 4 節では人間環境科学研究所での企画について報告し、最後に今後の ABC の展開について述べることにする。

#### 2. アドベンチャーカウンセリングとは？

##### 2-1 ABC の起源、歴史背景と現状について

ABC とは米国において過去 40 年近く教育界に高い評価を受けているアドベンチャー教育の手法、プロジェクトアドベンチャー（Project Adventure；以下 PA）により開発されたプログラムである。さらに PA の起源は 1941 年にイギリスで生まれたアウトワード・バウンド・スクール（Outward Bound School；以下 OBS）にある。OBS は戦時中の海軍訓練がその趣旨であったが、追求された教育理念は、創設者クルト・ハーンの「真の教育は体験によって得られ、若者は経験することにより、真の自分自身を発見し、積極性、粘り強さ、チャレンジ精神、他者への思いやりなどを育てられる」の言葉に表されており、参加者の自己概念の向上および全人的な成長を目指すアドベンチャー教育のスタートとなった（日本アウトワードバウンド協会, 2006）。

このハーンの考え方を元に 1971 年アメリカ、マサチューセッツ州のハミルトン・ウエンハム高校の校長ジェリー・ペイが同校のカリキュラムに導入したものが PA である。同校でスタートした PA プログラムには OBS の理念が受け継がれ、学校カリキュラムにおいても野外をフィールドとしたアドベンチャー活動(身体的リスクを伴う活動や 1 ヶ月近い遠征)を通して、生徒の成長を支援していたが、1974 年には全米普及ネットワーク (National Diffusion Network) の普及事業として他学校への汎用を目的に模倣可能な、ある意味パッケージ化されたプログラムが開発されるようになった。さらには、当時の病院での外来治療にアドベンチャー活動を取り入れたカウンセリング手法を学校における特別な支援を必要とする生徒を対象として「冒険を基礎としたカウンセリング」、現在の ABC の実践スタートとなったのである (Schoel, Proudly & Radcliffe, 1989)。

その後、PA, Inc. の設立により PA はさらに広がり、上記学校分野での ABC プログラムはいうまでもなく、病院や療養施設等医療機関での治療プログラム、企業でのチームビルディングやメンタルヘルス対策、さらには罪を犯した青少年更生プログラム等多様な分野に導入されている (難波, 2006)。

日本においても 1995 年に株式会社プロジェクトアドベンチャー・ジャパン (以下、PAJ) が設立、国公立少年自然の家、野外活動センター等の青少年施設にロープスコースが建設され、また同時期に都道府県市町村 (宮城県・山口県・滋賀県等) 単位での教育委員会が導入、林間学校・自然学校などの協調性や積極性を育むことをねらいとしたプログラム体験の提供や教員に対する研修が実施されている (独立行政法人国立山口徳地少年自然の家 TAP: 徳地アドベンチャープログラム、兵庫県立嬉野台生涯教育センター HAP: ひょうご冒険教育プロジェクト等)。また、大学教育においても玉川大学 (TAP センター) や帝塚山大学 (心理学部) に加えて、関西大学 (人間健康学部)、神田外語大学 (体育・スポーツセンター)、流通経済大学 (スポーツ健康学部) では専用施設を保有し積極的に導入している。

## 2-2 ABC の教育理念と手法

本学で実践している ABC の教育理念と手法は、PA のそれをベースにしている。フルバリューコントラクト (Full Value Contract: 以下 FVC) とチャレンジバイチョイス (Challenge by Choice: 以下 CBC) は、欧米の冒険教育・セラピー分野で、一般的に使われるようになった基本理念である (工藤, 2016)。FVC はグループメンバー全員を最大限に尊重するという意味であり、具体的には「自分を含めメンバーをけなしたり、軽んじたりしない」「お互いの心の安全と身体の安全を守る」「ネガティブなことにこだわらない」等、相互に尊重し合いながら活動するための約束である。約束を守りながら活動、挑戦していくことにより、初めて人は相手に心を開くことができるからである。Schoel & Maizell (2002) は、フルバリューの構成要素を「Be Safe (心と身体の安全)」「Be Honest (正直、公正さ)」「Be Here (今ここに目を向ける)」「Let go and Move on (こだわらずに先に進む)」「Care for Self and Others

(自分も他者も大切にする)」「Commit to Goals (目標に向かう)」としており、学校の授業などでは、児童生徒に理解しやすい表現として、「Play Hard (一生懸命に)」「Play Safe (安全に)」「Play Fair (公正に)」「Have Fun (楽しんで)」と示す場合もある。

他者からの強制や強要は存在しないが、人によっては、これを「何もしなくていい権利」と解釈することもあるので注意が必要である。本来の考え方は、個人が挑戦しないと選択した場合でも、その個人がグループの一員として目標を達成するために何ができるかを自分で考え、できる範囲において協力を行動に表す責任を持つことである。PA が大切に心理面、感情面の安全を維持する上で、個人の意思決定を尊重するためのものである（工藤, 2016）。

また CBC は、個人の挑戦は他人に強制されてではなく、自分の意志で決定し行動するという考え方である。ABC が大切に感情面の安全を維持する上で、CBC は個人の決定を尊重するためのものである。FVC と CBC を背景とした受容的なグループ環境が形成されることにより、メンバー個人の身体的、心理的な安全が確保され、自分にとって精神的に快適・安心な領域 Confort Zone (Luckner&Nadler, 1992) から踏み出すようなチャレンジを促すのである。チャレンジするためには、FVC をガイドラインとしたグループおよび個人のゴール（目標）を設定することも重要である。目標設定することにより活動への意欲が高まり、達成へと向かうのである。（Proudy,Proudy&Radcliffe, 1989）

さらに、独自の手法ではないが、目標を達成するための手段として、体験学習サイクル (Kolb, 1984) も取り入れている（図 1）。体験学習は、従来の学習にただ体験する機会を増やすという単純なことではなく、体験・実行したことをふりかえり、それを一般化、さらに次の体験・実行、あるいは他の活動に生かせるある基準や法則を導き出すのである。目標を持ったグループと個人が、この過程を何度も繰り返すことで学びは深まり、日常への適用がされることになる（林, 2001）。

実際には、以上の考え方を基本として、個人とグループの目標を考慮した上でプログラムが組み立てられ、ファシリテーターと呼ばれる支援者が、グループの発達段階（図 2）と個人の状況に適したアクティビティ（表 1）を提供しながらプログラムを進行していく。これらの体験によって個人とグループが関係を築いていき、徐々にチャレンジレベルを上げていく。最初は遊びゲーム的な要素を取り入れて、人とかかわる楽しさに気づき（アイスブレイク）、グループでのコミュニケーションを重ね、関係を深めていくことから次のステップへ。課題解決（イニシアティブ）、信頼関係確認（トラスト）の段階を経て、ロー&ハイレメントチャレンジと呼ばれるロープやワイヤー、立ち木などで作られた専用の施設、「ロープスコース」での大きな達成感、協力、信頼など貴重な感情や体験が得られる。

学びの視点は「できた」「できない」ではなく、相互の関わりの中において、個人がグループ（他メンバー）に対して、あるいはグループ（他メンバー）が個人に対してフルバリューが保たれ行動できたかどうかである。

そして、成功体験での喜びと、失敗したときの悔しさなどを共有し、チームのエネルギーに変換することも大事である。グループが失敗した時ほどグループ内に潜む、マイナスな雰囲気や弱点が濾し出され、それによってフルバリューの風土が崩れることが多々ある。失敗というイベントには、グループを空中分解させる危険性と、それをバネ（レジリエンス）にしてより成長する可能性といったハイリスク・ハイリターンのところがある。ABC は、まさにそのためのトレーニングであり、日常に組織やチーム、グループが抱えている課題や弱点を見出すために、メンバーの前での自己開示や、敢えてリスクなシチュエーション（アクティビティ）を課して、それでもフルバリューを維持（FVC）しつつ、チャレンジし続けるよう支援していくものである。それは、もちろんチームがいつか直面するであろう「まさか」の事態に備えるため、ある意味「避難訓練」に似ている。避難訓練は真剣にやっておかないと、本番で役に立たないように、日常でフルバリューがしっかりしている組織やチームは、危機的状況においても安定しているどころか、むしろ危機的状況でますますパワーアップしているのである。

図 1 体験学習サイクル

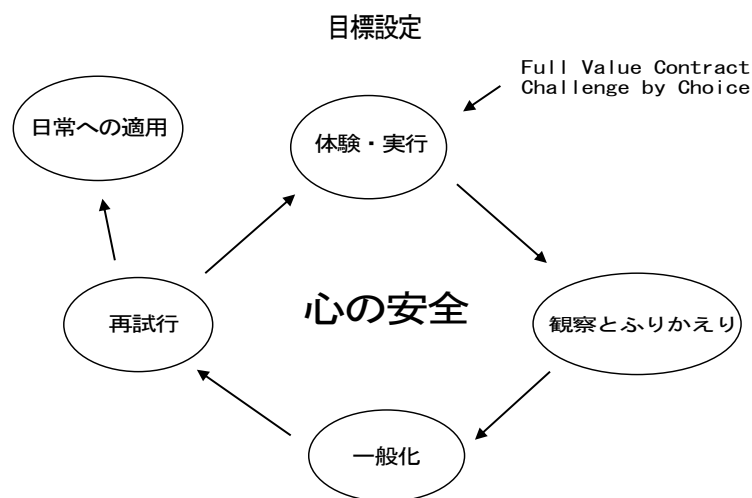


図 2 グループの発達段階

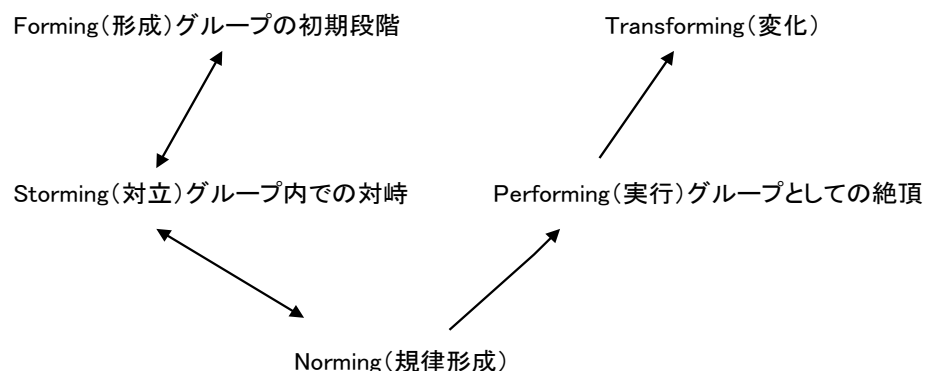


表 1 アクティビティの種類と内容

種類	内容
アイスブレイキング (Icebreaking=IB)	心身の緊張をほぐし、グループメンバーが居心地よいと感じる機会を提供する。
ウォームアップ (Warm up=WU)	プログラム開始直後やIBの前に行う心身の準備運動的な活動。
ディインヒビタイザー (De-Inhibitizer=DI)	比較的レベルの低いリスク＝少し恥ずかしさを感じるような活動を行い自己抑制をとっていく。
コミュニケーション (Communication=CO)	意見や思い、感情などをバーバル/ノンバーバル表現、伝える力を高める活動。
トラスト(Trust=TR)	IBやDIによって相互に安心感が生まれてきた段階で、身体的、感情的リスクを伴いながらメンバーとの信頼を確認していく活動。
イニシアティブ (Initiative=IN)	多様な課題を挑戦と失敗を繰り返しながら(Try&Error)グループメンバーの協力により解決していく活動。
ローエレメント (Low Element=LO)	50cm～4m程の高さの装置を使って、INよりもリスクが高い課題にグループでチャレンジしていく。
ハイレメント (High Element=HI)	7～10mの高所において、専用の器具類(ロープ・ハーネスなど)を使用し、グループメンバーに身体の安全を確保されて行う身体的、心理的リスクの高い活動。

### 3. 本学での授業実践

#### 3-1 心理福祉学部（現 心理学部）への導入

本学においては 2004 年度に心理福祉学部開設と ABC の屋内専用施設（アドベンチャー ロープスコース）の建設および事前研修を実施し、2005 年度より将来臨床家を目指す心理学科での必修科目「基礎演習（1 年次）」に ABC を導入、および「アドベンチャーカウンセリングⅠ・Ⅱ（2 年次演習）」、2006 年度からは「アドベンチャーカウンセリングⅢ（3 年次演習）」を開講した。

「基礎演習」における ABC では、大学生活という新しい環境への適応（授業自体を実際のグループ・仲間づくりの場とする）、グループワークと人間関係づくりを体験的に学ぶことを目的として、全学生を 1 クラス約 20 名に分け、前後期それぞれ 2 コマ（180 分）3 週（2005 年度開講当初は 4 週）ずつの受講形態とした。

また、「アドベンチャーカウンセリングⅠ・Ⅱ」では、基礎演習での体験を踏まえ、前後期各 15 週 ABC の理論と技術を体験学習サイクルに基づいて深めていくことを目的に開講、さらに「アドベンチャーカウンセリングⅢ」は、ABC の理論的な背景から適用領域および



セラピューティックな介入法としてどのように応用されているかを学び、将来多様な分野で活躍できる人材の育成を目指した。

ABC の導入による効果として、学生の大学生活への適応が見られ、学生同士だけでなく学生と教員間のコミュニケーションが円滑になり、教員への相談増加が授業欠席率の減少へつながった（松岡,小西,2006：小西,2008）。さらに教員間でのコミュニケーションが円滑になることにより、意思疎通と連携が保たれ教員同士の関係性が強化されることになった（川合,小西,2009）。

上記以外にも ABC に特化した授業ではないが、2006 年度の文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（以下 現代 GP）」の採択により、関連する科目「心理ボランティア実習」の一環として、ABC を導入していた交野市立小学校への学生や教員派遣による地域連携・支援を展開した。筆者が担当したゼミナール（2010-2016）においても交野市を含め ABC による教育支援の協定を結んだ機関・施設の事業プログラムに学生が参加した他、「家族療法論」はアドベンチャー教育分野で国際的に活躍している当時玉川大学准教授の難波克己氏（現 梅光学院大学特任教授）が担当し、ABC の理論と技法を通して講義を行った。

心理学部のカリキュラム改変により、「基礎演習」における ABC は 2017 年度を以って、またアドベンチャーカウンセリングⅠ・Ⅱ・Ⅲは 2019 年度を以ってそれぞれ終了したが、2018 年度より集中的なグループ体験を通して自己理解、信頼感形成、個人の心理的成長などについて学ぶ「グループアプローチ」にアドベンチャーカウンセリングが導入されている。

### 3-2 全学共通科目としての導入

2017 年度には全学教育開発センターの特別講義として「アドベンチャーカウンセリング」および「リーダーシップスキル開発」が全学部全学年対象に開講された。両科目とも心理学部での「アドベンチャーカウンセリング」の内容を踏襲しながらもチームビルディングやリーダーシップといった社会人基礎力を養う取り組みも扱っている。

翌 2018 年度には上記の 2 科目に代わり「人間関係とコミュニケーション」が開講された。

この科目は、心理学部での「基礎演習」導入時と同様に、ABC を中心とした体験学習の手法を通して、大学という新しい環境への適応を自己理解・他者理解および、よりよい対人関係の取り方・かかわり方（コミュニケーションスキル）について学ぶことを目的としている。各学部の 1 年次生のみを対象とした初年次教育の一環ともいえる授業である。

2018 年度は文学部（前期）、法学部（後期）の各 1 クラスのみの開講であったが、2019 年度には前後期各 3 学部（文学部、経済経営学部、法学部）3 クラスが開講。

さらに 2020 年度前期には 3 学部 4 クラス（文学部のみ 2 クラス）開講の予定であったが、コロナウィルス感染拡大のため不開講となった。後期にはオンライン（Zoom）と一部対面で 4 クラスの開講となった。

また、「人間関係とコミュニケーション」以外でも担当教員の依頼により演習系科目でのアイスブレイクやチームビルディングとして、2017 年度より文化創造学科と日本文化学科で ABC を取り入れている（河口,小西, 2021）。特に 2020 年度においては Zoom によるアイスブレイクに重点を置いた ABC 体験や他大学との合同ゼミのキックオフとしても実施した（河口,小西, 2021）。その他には「教職入門」で教職を目指す学生対象にも前後期各 1 時限（90 分）ずつではあるが実施した。

表 2 授業科目への導入

学部学科	授業科目(開講年度)
心理	基礎演習(2005-2017)
	健康科学(2005) 2006からはアドベンチャーカウンセリングへ移行
	アドベンチャーカウンセリングⅠ・Ⅱ(2006-2019)
	アドベンチャーカウンセリングⅢ(2006-2018)
	家族療法論(2010-2019)
現代生活	健康科学(2006-2016)
共通	アドベンチャーカウンセリングⅠ・Ⅱ(2017)
	リーダーシップスキル開発Ⅰ・Ⅱ(2017)
	人間関係とコミュニケーション(2018-)
その他 (単発実施)	ゼミナール:文学部・経済経営学部(2018-)
	基礎演習:文学部(2020)
	教職入門:現代生活学部(2020)

#### 4. 人間環境科学研究所企画での実践紹介

前述のように 2005 年度より ABC の心理学科カリキュラムへの導入が始まり、2017 年度には他学科での取り組みも開始されたが、一部を除き教員対象の ABC 体験の機会は少なかった。しかし、2020 年度のコロナウィルス感染拡大による授業のオンライン化が契機となり、人間環境科学研究所（以下、人環研）において「コロナウィルスに負けない授業展開」と題しての企画に ABC の取り組みが 2 回にわたって紹介されることとなった（2020 年 9 月および 2021 年 2 月）。

人環研は本学の教員を中心に、主として人間社会に関する政治、経済、歴史、人間行動を

扱う実証的な社会科学系と、生物学、運動生理学、物理学、栄養学、情報学等の自然科学系の研究者との交流を基盤として活動しているが、幅広い研究領域と実学領域を共有してきたという点では、ABCのFull Valueそのものを実践してきた組織と言える。

この企画の趣旨は、「コロナ禍における、共に学ぶ人々とのつながりを深める機会提供の検討」であったが、文字・言語情報だけによる遠隔授業下での学力格差の拡大や共に学ぶ意欲喪失の危機感から、身体活動を含む「作業」の共有体験と効果的な方法を体験するワークショップを取り入れることとした。第1回では、ABCの理論や実施した授業の紹介のみならず「人間関係とコミュニケーション」や文学部で実際に行っているZoomを使った体験を行い、第2回では、オンラインでは難しい身体的なつながりや協力が実感できる対面で行われるABC体験を実施した。

Zoomと対面での体験を通して見えてきたのは、コンフォートゾーンが形成されていないうちはZoomによるオンラインでのアイスブレイクは効果的であるが、元来「体験」という手法をベースにしているABCでは、心理・感情面でのメンバー同士の共感や身体・行動面でのコンフォートゾーン突破（Breakthrough Comfort Zone）が自己成長のカギとなる。それは対面での体験の中で、メンバーが相互にかかわり、支援しながらチャレンジを繰り返すことによって、オンラインでは得られない達成感やお互いの尊重と感謝の念が感じられた。それについては、第2回のふりかえり時の「最初は緊張していたがアイスブレイクを経て、（このチームと雰囲気）徐々にじっくりしてきた」、「（クライミングウォールにチャレンジして）目標に到達できたのはみなさんが後ろにいてくれる安心感があったから」、「失敗してもチャレンジし続ける、諦めの悪い大人の姿を見せないと！」といった参加した教員の声から伺うことができた（各回のABC体験の内容・実施アクティビティについては表3の通り）。

**表 3-1 「学び・創造の共同体づくり」ABC体験プログラム 2020.9.16**

第1回（Zoom）

実施アクティビティと解説	備考（ねらいなど）	種類
<b>ペン回し</b> あわせた両手の親指と人差し指の間にペンを挟み、手を離さずにペンを向こう側にやる	何なんこれ？という感じと、通常の研修とは違うかな？という関心を抱かせるスタートのつかみ	ウォームアップ
※ここからはブレイクアウトルームを使って一人数だと緊張するし不安もあるので少人数（3～5人）にわかれて行うー		
<b>自己紹介×3回</b> 3～4人組でテーマを決めて（①所属学部 ②参加理由ほか）自己紹介しあう	とにかく、お互いを知る。少人数という安心感から饒舌になる人も？！	アイスブレイク コミュニケーション
<b>絵しりとり</b> 少人数（4～5人）に分かれて、絵だけでしりとりをしていく。ヒントは一切なし。できるだけたくさんつないでいく。	描き手のうまい/へたよりも、絵を見た人の捉え方、多様性に気づく	コミュニケーション



表 3-2 「学び・創造の共同体づくり」ABC 体験プログラム 2021.2.25

第2回（学園前キャンパス心理実習室）

実施アクティビティと解説	備考（ねらいなど）	種類
<b>UBUNTUカード</b> カードを用いて、同じアイテム（絵）を探す。早く答えた方がカードを取得。最後にすべてのカードを取得した人がチャンピオン	Ubuntu（ウブント）とは「みんながいるから、私がいる」というアフリカ由来の言葉、「大阪出身やねん」「やあ、うちも」的な感じでしょうか？（川合）	ウォームアップ
<b>Rain's coming Rain's going</b> ファシリテーターと同じ動作を順番にやっていく（連鎖）、①手をこすり合わせ ②指を鳴らして ③軽く手をたたいて ④強く手をたたいて、あとは逆戻りしていく。最後は膝の上に手を置いておしまい。	風が吹いて雨雲が近づく、徐々に雨が降り出しピークを迎えたら、また徐々に止んでいく様子を喋らず静かに表現。人の動作をみようとして集中したり、小さな音と大きな音メリハリがついているのがポイント。	ウォームアップ
<b>インパルス(ホイ・ヘイ)</b> 右の人からきたのと同じ動作（手をたたく）を左の人へ送っていく。次にかけて声「ホイ」と言いながら送る。今度は逆（左から右へ）かけ声は「ヘイ」、さらには左右同時に。	集中と緩和、どちらか一方だけだとできるが、同時にすると混乱してエラーが起こるが、そのエラーが笑いを引き起こしアイスブレイクとなる	アイスブレイク
<b>Stop &amp; Go</b> 「Go」は「前進」「Stop」で止まる「Jog」で軽く走り「Turn」で逆方向、次に「Go」と「Stop」の言うこととやることを反対にする	認知と行動の不一致（知っていることとできることは違う） エラーを楽しむ 言葉にあわせて動くが、言葉と動きが一致しないと…	アイスブレイク
<b>風の神(東西南北の少人数バージョン)</b> ①一人を中心（風の神）に、東西南北を決める ②メンバーは、各方向に分かれ立つ ③風の神は、その場でいろいろな方向に動いて（回って）みる ④他のメンバーは、風の神の動きにあわせて、自分の方向に動く	動きを合わせる（ボディコミュニケーション） 風の神は円の真ん中で回るだけだが、自分の動きがどれだけみんなを動かすのか？周囲への影響力への気づき 相手がいることを意識して、ゆっくりと動くことが大事	アイスブレイク コミュニケーション
<b>ミラーストレッチ 東西南北バージョン</b> 4人が東西南北に分かれて向き合う。対面(東と西、南と北)それぞれのどちらか1人が身体を動かす。もう1人はそれを鏡のように真似る。	動きを合わせる（ボディコミュニケーション） 風の神ほど影響力はなく、むしろ、いかにシンクロできるかがポイントであり、動きに緩急をつけるとストレッチの効果が増す	ウォームアップ コミュニケーション
<b>Step in Step out</b> 「step in(前)」, 「step out(後ろ)」, 「to the right(右)」, 「to the left(左)」に、それぞれ軽くジャンプする。次は、言うこととやることを反対にしてみる。	Stop & Goと同様に、知っていることと出来ることは違う エラーを楽しむ 言葉と反対の行動をすることは意外と難しい。 ということは、言葉にすると行動が正確になる？	アイスブレイク
<b>1・2・3・1・2・3……</b> ①二人向き合って、1・2・3をテンポよく交互にカウントしてい ②次に「1」と言う代わりに手を頭の上で叩く。2・3はそのまま ③さらに「2」の代わりにその場でジャンプする。3はそのまま ④最後は「3」の代わりに、英語で猫の鳴き声「Meow(みゃお)」	多様なコミュニケーション、恥ずかしさからの脱却 ちょっと恥ずかしいこと、バカバカしく思えることも、全員一緒に笑い飛ばしてしまうと本当に楽しいことを体感	ディインヒビタイザー アイスブレイク
<b>ヘリウムフープ</b> 全員で輪になり1つのフラフープを両手の人差し指で支えたまま床まで下ろす。誰か一人でもフープから指が離れたらリセットして再チャレンジ。	信頼、協働「あわせる」とはどういうことか？ Play Fair：指が離れたらあなたは正直に言えますか？ 簡単にできそうなのに、みんなが好き勝手なことをいいます。	イニシアティブ
<b>ワムサムサム</b> 1つの輪になり、いざ出陣！ワムサムサム、ワムサムサム、グイグイグイグイ、ワンサムサム、アーハ、アーハ、グイグイグイグイ、ワムサムサム	リスクを受け入れる、恥ずかしさからの脱却 ブレイク後、再スタートのセレモニー。怪しい集団ではありません一心の開放、安心できる仲間としての認識	ディインヒビタイザー ウォームアップ
<b>クライミングウォール～帝塚山の壁</b> 高さ8m、命綱を使った安全確保により、ホールドを用いて頂上を目指す。高さが増すにつれ不安と手や腕・足の疲労を感じながらも目標 チャレンジの準備 装備（ハーネス、カラビナ、ヘルメット）の装着方法 ビレイおよびコマンド（相互コミュニケーション）の方法	リスクを負ってのチャレンジ、目標設定、信頼、意思決定、至高体験 メンバーの支援を受けて自己成長を目指す、メンバーが自 チームづくりのはじまり チャレンジはクライマー（登る人）だけではなく、ビレイ（支援）チームメンバーも同じ	ハイエレメント
<b>チャレンジに際して一言（所属）</b> ・帝塚山で一番たくさん登ってますから（心理学部） ・とにかく天辺まで登ります（全学教育開発センター） ・とにかくベルを鳴らします。（経済経営学部） ・できるだけ頑張ってみる！（現代生活学部） ・ホンマ、いけんのかな？！（文学部）	<b>チャレンジを終えて一言</b> ・紫にチャレンジしました、ホールドがかなり難しい… ・2回掛けそうになりましたが、みなさんのおかげで… ・コワくて、下を見ませんでした。 ・ほんとに、あそこ手が届かないんです！ ・黄色中心に頑張りました。も～ないやん。	
<b>ふりかえり(ディブリーフィング、リフレクション)</b> ことばカードみんなの思いをカードで。チョイスされたことば「ほっ」「じんじん」「わーい」「わっはっは」「ほんわか」「わくわく」「ドキドキ」「よおーし」「ありがとう」「しゅくり」「ふらふら」「むむむ」	単なる活動の体験で終わらせないように（体験学習サイクル）、そして日常へ！ 不思議ですね。カードが私たちに呼びかけてきます。（川合）	—

## 5. おわりに

心理福祉学部から始まった ABC の取り組みであるが、他学部の授業などにその理念と手法を応用しながら徐々に増えつつある。本節では、今後の全学でのさらなる展開に向けての提案を行いたい。

第 1 に、「人間関係とコミュニケーション」に見られる初年次教育への本格導入についてである。現在「人間関係とコミュニケーション」は東生駒キャンパスの 3 学部・学科に前後期各 1 クラス（文学部は前期のみ 2 クラス）20 名定員で開講されているが、選択科目であるため全 1 年生が受講するわけではない。コロナ禍以前から初年次学生の大学への適応や高校までの受動的な学びから能動的な学びへの転換などの課題となっている中で、全学生への受講の機会提供が必要とされる。

参考までに筆者が非常勤講師として出講している関西大学人間健康学部では 2014 年度より、初年次教育科目（前期：スタディスキルゼミ、後期：導入演習）の各 15 回のうち 5 回に PA の理念と手法をもとに独自で開発した「関大型体験学習プログラム」を実施している（村川ほか, 2018）。なお、2017 年度からスタディスキルゼミでは、大学生活への適応に焦点をあて 15 回を通しての開講形態に変更、8 名ないし 9 名の教員が 1 クラス約 20 名の学生を担当している（灘ほか, 2019）。

本学においても初年次教育科目として全学部で開講されている基礎演習に ABC を組み入れることは可能である。関西大学のように 15 回すべてにという訳ではなく、少なくとも入学後 1 か月以内をめどに全クラスでの実施により円滑な大学生活への適応への一助になり得ると考える。

第 2 に、2 年次以降科目への導入検討である。すでに文化創造学科、日本文化学科などでは半期に 1 回程度、2 年次演習や 3・4 年次ゼミで ABC 体験を実施しており、一定の効果が上ると同時に課題も見えてきている（河口, 小西, 2021）が、初年次での全学生への導入が進めば、2 年次以降での対応、展開のヒントも見えてくることが期待される。

第 3 には、1・2 ととも関連しているが、今後授業への ABC 導入の拡大・増加に伴い課題となってくるのが、教員数の問題である。全国的にも ABC を含むアドベンチャー教育に携わる人材は少ないものがあるが、本学においては専門教員数もさることながら、ABC を知っているが、実際に体験した教員が少ない。2 節で紹介した通り、ABC は体験学習を取り入れているため、その効果や実際を知るために「体験」は欠かすことができない。

人環研の企画で ABC 体験した教員の感想では「こんな要素が毎日感じられたら、大学生活がもっとハッピーになるのでは!？」とあるように、ABC の教育効果の可能性を教員自身が体感している。そのために教員が ABC に参加し体験できる機会を多く提供する必要がある。体験を通して ABC の理念を理解し、簡単なアクティビティが使えるようになり、さらに、教員自身がファシリテートできるようになれば（河口, 小西, 2021）、「基礎演習」を含む

担当授業の内容が質量ともに高まり、学生の行動、姿勢にも肯定的変化がみられることが期待できる。

最後に本稿の結びに代えて、人環研企画のまとめの中での川合悟の言葉を紹介したい。今後の本学 ABC の展開を後押ししてくれている。

これからあと何十年も帝塚山大学を背負って立つ先生方には、コロナ禍で多様化する学生を受け入れ、そのご負担も増えたいへんだと思いますが、「帝塚山を愛し」「帝塚山に入学してくれた学生の成長を楽しみ」にして、そして先生方の力を結集し、悩みを打ち明け、励まし合えるチームに成長し、皆さん自身も次の 1 歩を踏み出して行って欲しいと思います。

最後に一言、私（川合）と小西が学級崩壊をしていた小学校での取り組みから学んだこと、それは「先生が仲良ければ、子どもたちも仲良くなる」です！

#### 【参考文献】

Kolb,D,A,（1984）：Experiential learning Experience as the source of learning and development（VOL.1）

Luckner,J,L. & Nadler,R,S.（1992）：Processing the Adventure Experience. Dubuque, IA:Kendall Hunt Publishing Company.

School,J. & Maizell,R,S.（2000）：Exploring Islands of Healing, Project Adventure, Inc. MA  
（プロジェクトアドベンチャージャパン訳 2017:グループの中に癒しと成長の場をつくる：葛藤を抱える青少年のためのアドベンチャーベースドカウンセリング）

Schoel,J. Prouty,D. & Radcliffe,P.（1989）：Islands of healing.Hamilton,MA：Project Adventure,Inc.(伊藤稔 監・プロジェクトアドベンチャージャパン訳 1997：アドベンチャーカウンセリングの実践)

川合悟, 小西浩嗣（2009）：アドベンチャーカウンセリングの実践 蓮花一己・三木善彦編  
「こころのケアとサポートの教育－大学と地域の協同」帝塚山大学出版会 pp.45-72

河川允勇, 小西浩嗣（2021）：アドベンチャーカウンセリングの活用実践－帝塚山大学文学部での取り組みに関する予備的報告－「人間環境科学」帝塚山大学人間環境科学研究所 第 28 巻 pp.〇〇-〇〇

工藤亘 (2016) : TAP の足跡とこれからの可能性-teachers as professionals モデル開発を目指して-「教育実践学研究」第 19 号 pp.55-76

小西浩嗣 (2008) : 現代 GP におけるアドベンチャーカウンセリングの実践「帝塚山大学心のケアセンター紀要」第 4 号 pp.11-24

灘英世, 櫻木規美子, 村川 治彦 (2019) : 初年次教育が社会人基礎力に与える影響に関する研究「身体運動文化論攷」第 18 号 pp.101-117

難波克己 (2006) : 動き出した心の教育 玉川アドベンチャー教育の取り組み「玉川大学学術研究所紀要」第 12 号 pp.107-114

日本アウトワード・バウンド協会 (2006) : アドベンチャープログラムコースガイド 日本アウトワード・バウンド協会 Official Paper

林寿夫(2001) : だれでもわかるプロジェクトアドベンチャー入門 P A J Official Paper

松岡有季, 小西浩嗣 (2006) : 基礎演習におけるアドベンチャーカウンセリングの実践「帝塚山大学心理福祉学部紀要」第 2 号 pp.9-25

村川治彦, 杉本厚夫, 三浦敏弘, 涌井忠昭, 小室弘毅, 灘英世, 安田忠典, 中川昌幸, 小野善生, 宮川治樹 (2018) : 実践知から生き方の探求へー関大型体験学習プログラム (K-ELP) の構築ー「身体運動文化論攷」第 17 号 pp.1-18